

大磯（下町）の左義長 — (1) —

日 守 高 造

大磯の左義長まつりは、道祖神のまつりとして多種・多様なかたちで行われているが、県の無形民俗文化財に指定されている、北下町・南下町・長者町のまつりは、8箇所の道祖神（大北・浅間・中宿・子の神・大泊り・浜町・坂下・長者）で行われ、その規模も海岸約1キロ以上にも及ぶ広さの中で、たいへん賑やかに、またかなりな奇祭といえる珍しいまつりである。

このまつりは、「せいとばらい・どんど焼き・左義長」などと呼ばれているが、「どみどんや」と言っていたことも覚えている。今では一般に「左義長」というようになったが、こんな名称はどうも儀式でも行うようであまりふさわしい呼び名ではないような気がする。

「左義長」は、「三毬杖^{さぎちよう}」とも書かれているようで、もともとは宮中の火祭り行事の呼び名で、昔、京都御所の清涼殿南庭で、青竹を3本立て、それに扇を結び付けて古書や書初めなどを焼いたと言われ、つまり宮中の儀式として正月15日に行われたと伝えられている。

大磯のこのまつりは、民俗資料として貴重であるし、その風習からいっても「せいとばらい」「どんど焼き」「どみどんや」などと言う方が響きがよく、いずれもぴったりはまった呼び名のようなのである。

一番息子

さて、このまつりの皮切りは、師走8日に南下町で行われる、俗に「一番息子」と言っている行事で始まる。

ヒイラギや鰯の頭を豆がらに刺し、家の戸口へ下げたり、挿^さしたりして、厄病神を追い

払って子供たちを守り、また年長の子供は陰石・陽石のような形の石を縄で縛り、その石を大地に打ちつけながら大声で「○○さんによい嫁さんが来るように、一番息子・二番息子・三番息子^{うた}」と唄いながら次つぎに石を打ち下ろし、賽銭^{さいせん}をもらって道祖神の世話人に持参、世話人は豆腐を買って子供たちに馳走する。豆腐は子供たちがまめに、丈夫に育つように、湯豆腐は身体を暖めるからだと言うことのようなだ。とにかくこれも一連の道祖神まつりであることは間違いなく、次代を負う子供たちを健やかに育てようということからの行事である。

松のお仮屋^{かりや}

正月の松の内を過ぎると、「せいとばらい」の準備が始まる。門松（昔は2～3メートルもの門松を各戸で立てた）や注連飾りを集めて14日に立てる、「せいとばらい」の塔（オンベ）に備えるのだ。普通門松などは、正月7日の朝、七草粥^{ななくさがゆ}を供えてから子供たちが集めるものだが、このまつりに限っては、普通のことをしていたのではろくに松も集まらない。さあ、そこで松集め子供作戦会が開かれる。何にしる「オンベ」を高く積み上げて、他^{よそ}より少しでも大きく立派につくるための松集め作戦会議である。餓鬼大将を中心に相談がまとまり、腕っ節の強い者の下に数人で1組、何組か編成してまだ七草粥のあがっていない6日の夜半に出かけるのだ。山手の別荘地帯や、国道沿いの商店街には大きな門松が立ち並んでいるからこれを他町へ持っていかれては負けである。自町内以外からどれだけ集めるかが勝敗の分け目である。どこの町内でも同じ作戦でくるから、松のぶん取り合戦はなかなかのものであった。そんな苦勞をし

て集めた松や、お飾りをうっかりしていると他町内からのかっぱらいに遭うので、子供たちは松のお飯屋を組み立てて防衛するのであるが、夜番を理由にして松のお飯屋で、餅を焼いたり、そばや菓子を食べたり、かるたやすごろくで遊ぶことの楽しさは、子供たちにとって忘れることの出来ないことであつたろう。

松買い

正月11日は松買いといって、「オンベ」の中心に立てる大松3本と、「オンベ竹」と称する「オンベ」の中心へ立てる大竹を買いに早朝から平塚方面へ出かける。

松買いは、宮の世話人と浜青年、それに子供たちというメンバーで出かけるのだが、浜青年たちにとっては、この日は正月で最も楽しかろう時でもある。それは平塚遊廓の日頃馴染の遊女に、招待されるのか、押しかけるのかは知る由もないが、朝から入りこんで夕方近くまで、何をしているのかこれもよくわからないが、なかなか出て来ないのである。



一方世話人と子供の一行は、海岸近くの松原で、手頃な松の品定めと、値段を折合って、持参した鋸・鉋^{のこぎり なた}などで松を切り倒して、運び手の浜青年の到着を待つのだが、これがその、おいそれとは来て呉れない。しびれを切らして仕方なく頃を見はからって、手分けして遊廓へ迎えを出すのである。

やがてのことによろしく手も揃って、さあお帰りというくだりには、陽は早や西に傾く頃になってしまうのだが、そこはそれ可愛い遊女から贈られた襦袢姿に紅い腰紐、青いたすき^{おみき}といういで立ち、それに御神酒の力を得て、東海道1号線経由、下り鈍行大磯行きの出発となるのである。

買った松は現在の松とはその大きさにおいて遙かに差があつて、根元の直径約30センチ、長さも凡そ10メートル余りもあるものを約3キロメートルを担いで来るのだから、だんまり歩行ではとても運び切れるものではない、まつりのことでもあり、海で鍛えた声もよろしく担ぎあげて、大磯甚句や伊勢音頭（今では左義長音頭といっている）を唄いながら神輿^{こし}を担ぐ風情で運んでくる。留守班の世話人たちは、これも早朝からお飯屋（神社の前の道路沿いに、仮小屋を建て、ここへ道祖神をおまつりする、凡そ1坪半、4.95平米）建てと、道切り提灯（お飯屋の道路をまたいで通行にさしつかえない高さに提灯20個くらい）を吊し、先着している「オンベ竹」には、五色の紙の吹流し、色紙で作った輪をつないだくさり^{きんちゃく}、これも色紙の巾着、近所の子供たちの書初め（字が上手になるよう）などが飾られ、20メートルの高さの「オンベ竹」が立って、吹流しなどの飾りものが、風に吹かれて美しく、町内のおまつり気分もすっかり整い松の来るのを今や遅しと待っている。やがて

松の町内入りに唄われる松前木遣が、唄自慢の美声で高らかに唄われ、「よいさ、よいさ」のかけ声に、怒涛のごとき勢いで町内へ殺到し、ひとしきり宮前で大磯甚句でねり歩い

研究ノートから

て、所定の場所におろされ、大磯^{しつ}でチョンということになる。

(議会事務局長・北下町在住)

文化期の大磯宿財政

一、
一般に宿場町の財政は苦しく、そのほとんどが赤字財政であったといわれている。では、大磯宿の場合はどうであったのだろうか。文化4～6年(1807～1809)の「宿入用勘定帳」(「相州海綾郡大磯宿伝馬関係資料」第1集所収)よりその様子についてみてゆきたい。

二、

まず、表1より文化4～6年3ヶ年間の総収支についてみてゆきたい。この表によると大磯宿の総収入は、ほぼ600両前後に一定しているのに対し、総支出は増加傾向を示しており、そのため収支の差額は、文化4年で279両余、同5年で404両余、同6年で322両余でしかもすべてマイナスの赤字となっている。この

表1

	文化4	文化5	文化6
収 入(A)	597両余	600両余	608両余
支 出(B)	876両余	1004両余	930両余
A - B(C)	-279両余	-404両余	-322両余
臨時収入(D)	219両余	309両余	295両余
C - D	-60両余	-95両余	-27両余

赤字に対し、臨時収入をもってその一部の穴埋めをしているが、それでも文化4年で60両余、同5年で95両余、同6年で27両余の赤字となっている。

三、

では、次に表2より宿入用の収入源についてみてゆきたい。宿入用の収入は、間口1間に対して掛けられる間口銀、高100石に対して掛けられる高役銀、高1石に対して掛けられる高掛取立銀、伝馬・人足の運賃である人馬賃金の4種類があげられる。これは宿財政収

表2

	文化4	文化5	文化6
間 口 銀	12532匁余	12532匁余	12532匁余
高 役 銀	5407匁余	5407匁余	5407匁余
高掛取立銀	232貫余	258貫余	239貫余
人 馬 賃 金	4519貫余	4399貫余	4281貫余
火災救済貸付金	85両余	85両余	85両余
人馬賃金割上納分貸付	57両余	57両余	57両余
人馬持立金貸付	22両余	22両余	22両余
扶助利足金貸付	42両余	42両余	42両余

入の基本といえるもので、前記4種以外は毎年の収入があるとはいえ、その性格が貸付金である以上、臨時収入ともいえるものである。しかし、その貸付金は総収入の34%に及んでいることから、大きな役割を有していることがわかる。また、収入項目の内、高掛取立銀と人馬賃金以外は収入費が全く同額であり、固定されていることがわかる。数値が変動する2項目の内、人馬賃金は減少していることがわかる。その原因として、輸送量の減少等が考えられるが、それよりも賃金の未払分が増していることがあげられるのではないだろうか。

四、

次に、支出の内容についてみてゆきたい。支出については、一定化しているものと、臨

表3

	文化4	文化5	文化6
宿持征馬料	180両	180両	275両
〃 人足料	90両	90両	100両
尾州家月並雇馬	28両	28両	28両
紀州家 〃	14両	14両	14両
不足人馬賃金	1121貫余	1485貫余	875貫余
問屋役人給金	107両余	109両余	110両余
諸人足給金	19両	26両余	26両余
御下無賃	106貫余	54貫余	46貫余
諸大名宿泊旅籠銭足分	103貫余	289貫余	72貫余
問屋場消耗品	5両余	4両余	782貫余
宿役人江戸滞在費	金3両余と銀12匁	金6両余と銀12匁	金12両と銀12匁
他借返済分	9両余	9両余	9両余
火災貸付金上納分	50両	50両	50両
地方諸入用	232貫余	268貫余	239貫余